

2. 訪問看護師研修事業

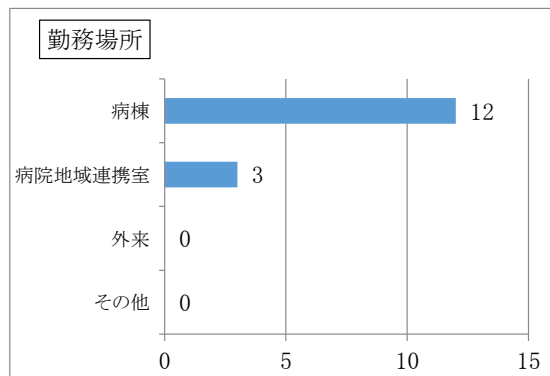
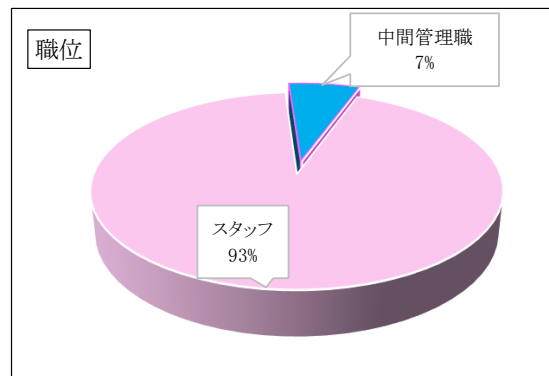
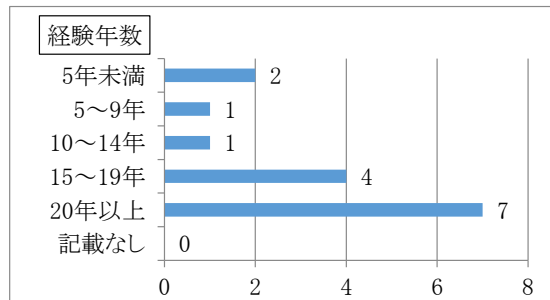
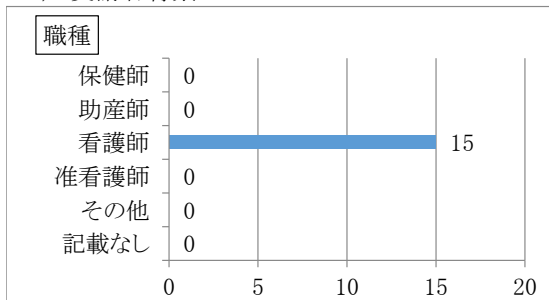
研修名	1) 施設－在宅を支援する看護師育成研修(退院調整看護師育成研修)	
開催日時	令和5年7月19日・7月26日・8月116日 (9:30～16:30) 実習3日間 期間 8月～11月	定員 : 24名
受講者数	令和5年7月19日 受講者数 24名(欠席 1名) オンライン 9名・集合 15名 7月26日 受講者数 25名 オンライン 9名・集合16名 8月16日 受講者数 24名(欠席 1名) 集合24名	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 施設－在宅の連携について学び、看護師の役割を明らかにできる 在宅療養者の状態に応じてケアおよびサービスの調整ができる 施設内の退院支援システムの課題を明らかにできる 在宅移行支援計画の作成ができる 	
講師	<ul style="list-style-type: none"> 訪問看護ステーションちかもり 所長 在宅看護専門看護師 山本 詩帆 細木病院在宅部教育課長 在宅看護専門看護師 井上 加奈子 高知赤十字病院 地域医療連携課 在宅看護専門看護師 山本 恵理 	
内容	講義 <ul style="list-style-type: none"> 施設－在宅の移行を支援する看護師の役割と機能 施設－在宅の移行期における療養者と家族への支援(実践) 退院調整の実際 病院・施設内の組織化と在宅への移行期にある事例のケア検討 訪問看護ステーション・訪問診療・施設等の実習 <ul style="list-style-type: none"> 同行訪問で在宅療養の実際を体験し、在宅移行支援に向けて医療機関看護師の役割を考える 	講義・演習 実習

1. アンケート結果

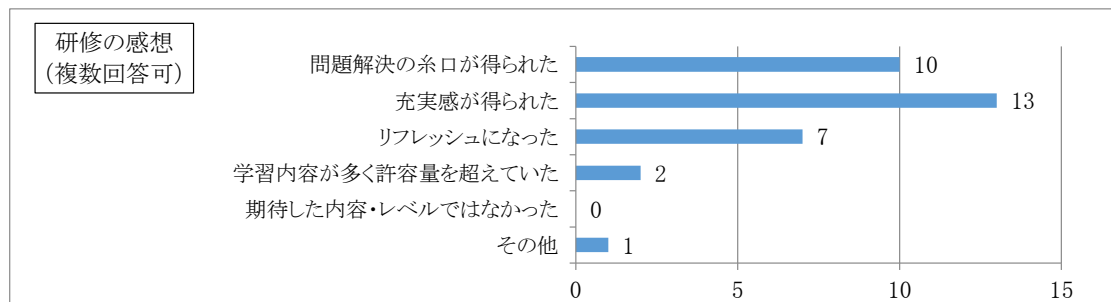
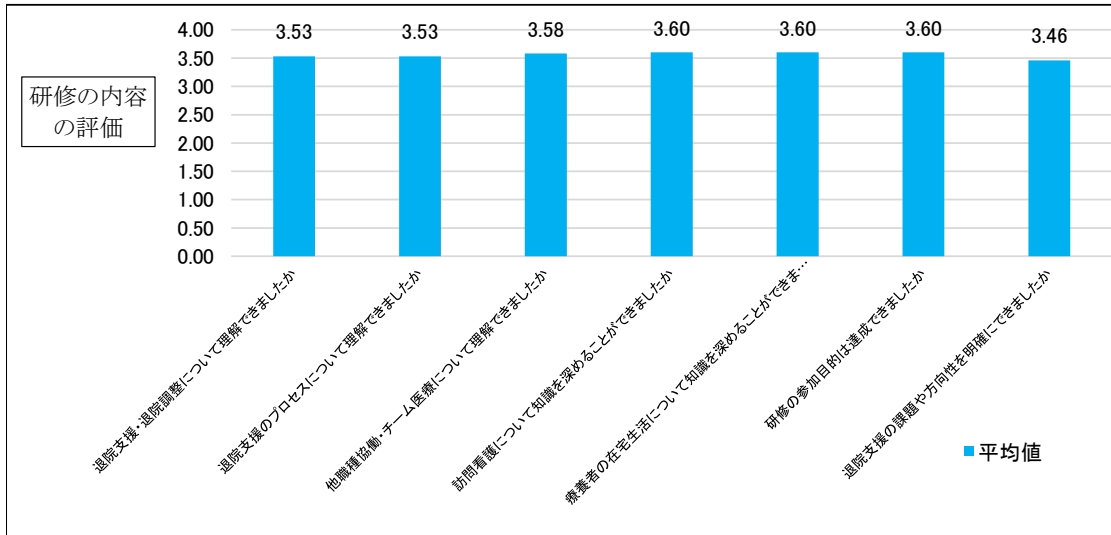
アンケート実施日 令和5年 8月16日

アンケート回答数 15名 回収率 62.5%

1) 受講者背景



2) 研修内容について



2. 意見・感想(抜粋)

- ・仕事に反映出来るよう努めたいと思う。
- ・色々な病院で働いている方の意見をきいて勉強になった。
- ・訪問看護を離れ、勉強の為病棟で経験している。また訪問看護へ行きたいとより思った。
- ・これまで病棟勤務の経験しかなかったので、今回の研修は新鮮でとても勉強になりました。勤務先が急性期の病棟なので、自宅退院する方はだいたい自立している検査入院の方だったり、その他は転院する方も多く、普段なかなか在宅の視点で患者さんと関わることが少なかったことで視野が広がった。患者、家族の意向を尊重することは病院においても、地域においても共通する視点だと思った。
- ・訪問看護の仕組みや退院調整のプロセスの糸口を知れてよかった。グループワークも様々な意見を知られて楽しかった。
- ・参加人数が丁度だったと思う。
- ・グループワークが苦手だが、構成人数が丁度で楽しく出来た。
- ・地域連携室に所属し約5ヶ月で、全てが初めての業務であり自分にあつたレベルかどうか不安であったが、分かりやすい内容であった。

3. 研修担当者のコメント

令和2年度より受講者が減少し、令和4年度は14名となっていたが本年度は受講者が25名と増加となった。この研修は、講義・演習の他に在宅療養の現場を知る必要を考慮して、同行訪問・見学実習を取り入れ研修を開催している。実習記録には、①自宅での看取りに立ち会った経験 ②本人の希望や家族の意向を早めに確認する必要性を学んだ ③サマリーを記載する時にADL・IADLが必要であると思った等の実習の学びが記載されていた。指導者のコメントとして、本人のニーズに合い家族の負担の軽減に繋がる安心した在宅生活を支援することや本人・家族との信頼関係を築くことが大切であること、少し視野を広げて看ることの勧め等が記載されていた。以上のことから同行訪問・見学実習は、受講者の貴重な経験となっていると思われる。次年度は、複雑な課題をもっている事例の検討など、研修内容をイメージ受講してもらえよう説明を追加して募集したい。

2. 訪問看護師研修事業

研修名	2)施設－在宅を支援する看護師育成研修 シンポジウム ～多職種をつなぎ、在宅療養を継続するための支援について考える～	
開催日時	令和6年2月17日(土) (13:30～16:00)	定員 : 50名
受講者数	受講者数 20名	会員:17名 非会員:3名
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅への移行支援に必要な知識を得て、医療機関・施設から在宅への円滑な移行を支援できる ・在宅療養者と家族が抱える課題を明らかにして、在宅生活を継続するための支援について学ぶ 	
座長	<ul style="list-style-type: none"> ・高知県立大学看護学部特任教授 森下 安子 ・高知生協病院在宅療養センター 医師 原田 健 ・高知中央居宅介護事業所 介護支援専門員 植田 五美 	
シンポジスト	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問看護ステーションLOCAL 看護師 中本 知子 ・訪問看護ステーションLOCAL 理学療法士 西村 聡二 ・あじさい薬局北本町 薬剤師 西村 直祐 ・ホームケア土屋高知 訪問介護士 片平 光 畑山 一樹 ・サービス利用者 向井 克彦 (ビデオレター) 	
内容	人工呼吸器を装着して在宅サービスを利用している向井氏に対する各職種の関わりについて	

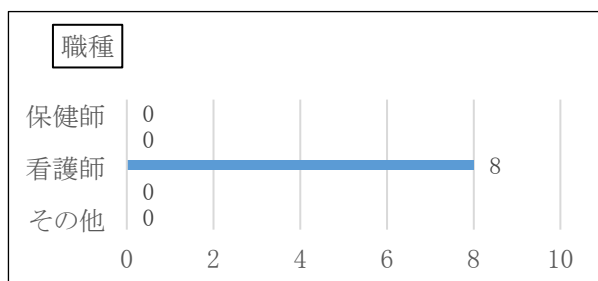
1. アンケート結果

アンケート実施日 令和6年 2月17日

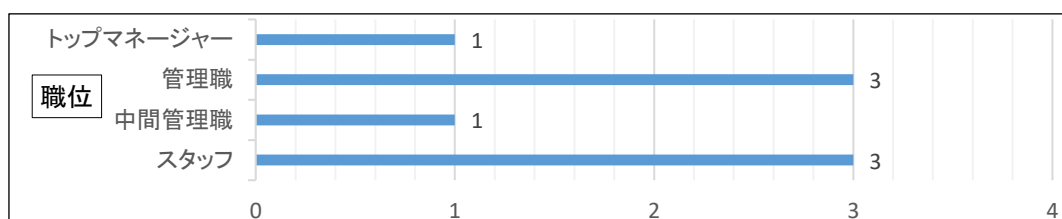
アンケート回答数 8名

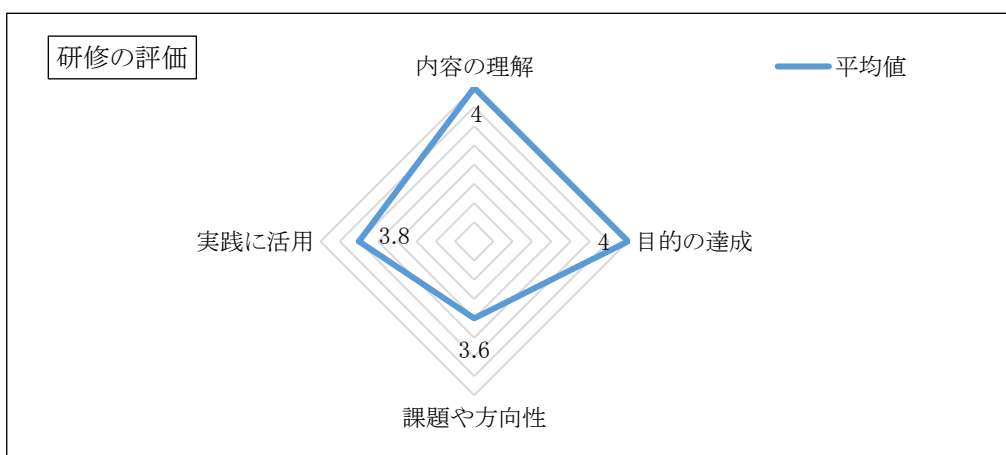
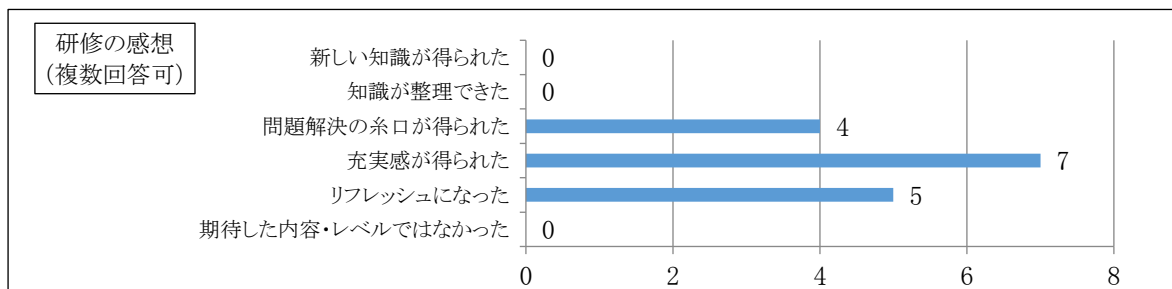
回収率 40%

1) 受講者背景



2) 研修内容について





2. 意見・感想(抜粋)

- ・多職種が協働し、対象者の方を支えているのがよくわかった。
- ・とても心温まる現実だった。在宅の大変さが分かる分とても成功の良い内容だった。様々な課題に取り組み在宅での生活を支えていけたらと思った。
- ・在宅で実際に行われている多職種の関わりを知ることができ今後の支援に活かしたい。
- ・多職種の方がそれぞれの視点で発表され、理解が深まった。とても有意義な研修だった。
- ・資料があるとよかった。

3. 研修担当者のコメント

今回、人工呼吸器を装着して在宅サービスを利用している方への各職種の関わりについて、多職種を含めてシンポジウムを初めて開催した。オープニングで利用者の方をビデオで紹介し在宅での様子がイメージしやすく、率直な思いを語ってもらえ心に響いた。また、シンポジストの方々と参加者との意見交換ができた。今年度は、シンポジスト決定のため広報期間が短く、参加者も20名と少なく看護職のみの参加であった。来年度は、多職種が参加してもらえるよう広報の方法を考えるとともに開催方法もハイブリット方式をとり、沢山の職種に参加してもらおうよう計画したい。